

神奈川県キャンプ協会 (PACK)

Prefectural Association of Camping, Kanagawa

NEWS

No.5

from : North

East

West

South

平成24年1月15日発行

新春のごあいさつ

神奈川県キャンプ協会とNPO法人県野外活動協会の連携に思う

会長 小林 新治郎

新年にあたり、会員みなさまのご健勝を願いながらあいさつを述べさせていただきます。

昨年3月11日に発生した東日本大震災は、まさに世界を驚かせた悲惨な自然災害でした。

角度を変えて見ると人間関係の希薄化が進んでいると言われる現代、ある意味では日本民族にとっては自然からの教訓を与えられたような気がします。改めて被災者の方々の一日も早い立ち直りを心からお祈りしています。



さて、神奈川県キャンプ協会 (PACK) の今年度にかかる思いを、理事会で共通理解し合った事項について会長として皆さんに伝えたいと思います。機関紙No 3、No 4でも伝えていますが、大きく3つの分野の内容を今年度も積極的に事業へと組み込みました。

まず、会員の優れた技能・技術に合わせ、更なる資質と能力の向上を図るため、アウトドア活動のいろいろ、マリンスポーツフェアなど。2番目には、NCAJ(日本キャンプ協会)との連携で実施している指導者養成とその充実、またインストラクターやディレクター研修の実施、11月下旬及び12月上旬のシンポジウム・パネルディスカッションが挙げられよう。3番目には、地域活動や小・中学生、PTA活動への支援(12月中旬の楽しい茶葉料理教室の実践活動)がありました。地域のコミュニケーションづくりは災害への対応のあり方にも効果があり、まさに共感し合える事業と言えます。自然体験を通してしっかり自然と向かい合い自然の摂理を知ることは「生き方」「実践力」「いたわり」を共感できるのではないのでしょうか。

会員みなさんの力で今年は更に龍のように力強い意義ある年にしましょう。みなさんの実践力が当会を支えてくれるものと期待しています。年頭にあたり、会員皆さんのご多幸をお祈りしています。

Contents

新春のごあいさつ	
神奈川県キャンプ協会とNPO法人県野外活動協会の 連携に思う	1
シンポジウム開催に向けての事前打ち合わせ会議	2
基調講演 (要旨)	
野外活動関連団体による地域社会への貢献	2

キャンプインストラクター資格認定講習会実施報告	3
からだに優しい 茶葉料理教室の開催	3
日本キャンプ協会関東ブロック会議報告	4

報告事項：シンポジウム

「野外活動関連団体が担うべき“災害を含めた地域社会の安全”への役割」について 【シンポジウム開催に向けての事前打ち合わせ会議】

日時 平成23年11月17日(木) 15:00~16:30
場所 日本赤十字社神奈川支部 6F 第3会議室
出席 鈴木、小日山、今井、熊谷、中村、高野、宮沢
議題 1) シンポジウム開催要項の確認
①シンポジウム開催趣旨について
②プログラムについて
③出演者について
④当日の流れについて
2) シンポジウム開催の準備状況について
①会場、設備、準備品等の確認
②各団体における参加希望者の現状について
3) 開催当日の役割分担について

【シンポジウムの開催】

日時 平成23年12月3日(土) 18:00~20:00
会場 日本赤十字社神奈川支部 6F
第1・2・3会議室
参加者 募集定員80名(開催当日は86名の参加があった。)
(運営役員：高野、鈴木、三浦、藤野、坂口、宮沢、鋸持、原、)

プログラム

開 会 18:00
挨拶 黒岩 祐治(神奈川県知事)
基調講演 [野外活動関連団体による地域社会への貢献]
鈴木 秀雄
(アウトドア活動・マリンスポーツ普及実行委員会委員長 関東学院大学人間環境学部教授)



パネルディスカッション 「野外活動関連団体が担うべき“災害を含めた地域社会の安全”への役割」

パネリスト(五十音順)

小川恵一郎(サーフ90 茅ヶ崎ライフセービングクラブ代表)
小日山 明(神奈川県教育委員会教育局教育指導部保健体育課指導主事)
野口理恵子(日本赤十字社神奈川支部事業部救護課長)
山上 武久(神奈川県子ども会連絡協議会・会長)

コーディネーター

坂口 正治(神奈川県キャンプ協会監事, 東洋大学ライフデザイン学部教授)

閉 会 20:00 終了後、会場整理、20時30分散会。

シンポジウム

野外活動関連団体が担うべき“災害を含めた地域社会の安全”への役割

【日時】 平成23年12月3日(土) 18:00~20:00
【会場】 日本赤十字社神奈川支部 会議室

基調講演(要旨)

野外活動関連団体による地域社会への貢献

アウトドア活動・マリンスポーツ普及実行委員会委員長
鈴木 秀雄
(関東学院大学人間環境学部教授、Ph.D.)

★-1. 3.11 東日本大震災の被災者が伝えた掛け替えのない“温かな心の文化”

本年は、国内外で未曾有の自然災害に見舞われ、特に3月11日の東日本大震災では、はかり知れない人命が奪われ、未だに多くの行方不明者の所在が確認できていない。改めて災害による犠牲者の方々のご冥福をお祈りし、ご遺族に哀悼の意を表し、また、被害にあわれた方々への心からのお見舞いを申し上げます。

たとえ、人が災害などにより、どのようにQOL(生命の質・生活の質・人生の質)を低下させざるを得ない困難・状況に陥ったとしても、個人の生きる喜び(Enjoying Personal Living; EPL)を僅かな光の中にも見つけ出していくことが次への生きる力(源)となり、それが日々寄り添う、掛け替えのない”とっておきの”楽しさ・おもしろさを求めて、豊かな”活動”、“生活”、“生き方”を紡ぎ出すことに繋がっていく。このことが正にレジャー・レクリエーションの本質であり、真髄であり、原点でもある。このような事柄にも野外活動関連団体は、地域社会に対し目に見える貢献が出来るはずである。

今回の東日本大震災を通して、あらためて”いかに人は共に幸せに生きるためにどのような羅針盤を持つべきか”、余暇における自由裁量活動や状態であっても、単に利己的な”考え方”ではなく、人との繋がりや絆や思いやりを大切に、利他的な”生き方”の重要性を東日本大震災の被災者である人々が、日本国内ばかりでなく海外の多くの人々をも感銘させる気高い行動規範を示し、”絆”や”つながり”そして”思いやり”を大切にする日本の心温かい豊かな文化が脈脈と息づいていることを実証しました。

日々、自身の興味や関心に基づいて、楽しさやおもしろさを求めて多くの人々が野外活動関連団体で活動されているのですが、その関連団体の本来の趣旨を超え、あらたな領域において地域社会の安全に寄与することは重要であろうと考えます。

★-2の1. 野外活動関連団体の余暇における活動と機能の本質

ここに一つ目の社会貢献の芽が存在している(関連団体として、何か出来るであろう)

いままで ①余暇における楽しさとおもしろさの追求 ⇒ 利己的要素

主催:

★アウトドア活動・マリンスポーツ普及実行委員会
★神奈川県キャンプ協会

これから ②余暇における社会参加や社会貢献 ⇒ 利他的要素^{註1)}
註1 仏教の世界で言う「忘己利他(もうこりた)」自身の利益を忘れ、多者のために尽くす。
それが、パソコンの変換ミスのように”もう、こりた(もう懲りた)”になってはいけない。

★-2の2. 余暇の機能から余暇活動を分析してみると(機能①、②、③のバランスが大切)

いままで ①休息・休養機能 ⇒ 回復機能 ⇒ } ①、②は利己的要素が強く、③は利己的要素が弱い機能
②気晴らし・娯楽機能 ⇒ 発散機能 ⇒ }

これから ③自己啓発・自己開発機能 ⇒ 蓄積機能 ⇒ } ③は利己的要素が含まれる機能
(社会参加や社会貢献)

★-3の1. 地域社会(Community)が抱える諸課題

ここに二つ目の社会貢献の芽が存在している(単一の団体でなく関連団体として、何か出来るであろう)

いままで ①横のつながり、縦のつながり ⇒ 絆
これから ②新たなつながり(クロスオーバー)^{註2)} ⇒ 自助、互助、共助、公助

註2. Crossoverーここでは現在有るものの種々の要素を組み合わせ新たなものを紡ぎ出す意。
換言すれば、多くの野外活動関連団体が新たな動きを紡ぎ出すことである。

★-3の2. 野外活動関連団体の”連携”による地域社会への貢献

例えば:

- 1) 防災^{註3)}・防犯・非行防止に限らず
- 2) 地域社会づくり(地域文化づくり、絆、思いやり、つながり)
- 3) 子どもの成長・発達
- 4) 青少年の育成
- 5) 中高年者の健康
- 6) 高齢者の生き甲斐
- 7) 公徳心等の高揚
等々の課題に対する貢献。

註3. 阪神淡路大震災で、がれきの中から助け出された人の多くは、家族や隣人・周囲の人たちによる救出である。自主防災組織などへの協力も欠かせない。(身近な人・関連する団体の連携)

★-4. 野外活動関連団体の余暇活動に求められる”自由であるが故の規律”^{註4)}

(このまじい行動の社会化と自然化)を促す

ここに三つ目の社会貢献の芽が存在している

- ① 絆 ⇒ 思いやりのある子ども達を育成していく
- ② モラル ⇒ 心地よい関係を構築していく
- ③ 公徳心^{註5)} ⇒ 社会生活の中で守るべき道徳を高めていく
- ④ 社会規範 ⇒ 拠るべき基準を高め豊かな社会を構築していく

註4. 自然公物は原則自由使用であるが、そこには自己責任が明確に伴うことの理解が大切である。

註5. 高徳を重んじる精神 ⇒ 公徳心は英訳すれば、Sense of Public Duty 即ち、公徳心とは、公共、一般社会に対し

ての義務である。

★- 5. "いざ"と言う時のキーワードは：

周囲にあらゆる困難が生じた時、ただ傍観者（Bystander）になることなく、

その時、その手で、その人が
言い換えれば、その時、その手で、その団体が 何かをしていく姿勢や行為が重要である。

そのためには、日頃から、野外活動関連団体が連携をとり、それぞれの団体が団体の特性を生かしながら、何をどう地域社会に社会貢献すべきか、常に考えておくべきであろう。

★- 6. 期待

これを機に、多くの野外活動関連団体が緩やかなくくりの中で、新しいつながり（前述の★- 3の1. 註2. のクロスオーバー）として、"野外活動関連団体連絡協議会"のような組織が構築されるよう強く期待し、その実現を願って、基調講演を閉じる。

パネルディスカッション

「野外活動関連団体が担うべき

"災害を含めた地域社会の安全" への役割」

パネリスト(発題順)

- 野口理恵子（日本赤十字社神奈川支部事業部救護課長）
小川恵一郎（サーフ90 茅ヶ崎ライフセービングクラブ代表）
山上 武久（神奈川県子ども会連絡協議会・会長）
小日山 明（神奈川県教育委員会教育局教育指導部保健体育課指導主事）

コーディネーター

- 坂口 正治（神奈川県キャンプ協会監事、東洋大学ライフデザイン学部教授）



坂口正治 氏



シンポジウム風景



野口理恵子 氏



小川恵一郎 氏



山上武久 氏



小日山 明 氏

キャンプインストラクター資格認定講習会実施報告

2012年1月9日

人材養成育成委員会

池谷 潤

- (1) 日 時 A：2011年11月25日(金)～2011年11月27日(日) 2泊3日
(2) 会 場 横浜子ども自然公園青少年野外活動センター
(3) 応 募 30名程度(先着順)とし募集し、応募者12名
(4) 実施人数 12名中受講料を振込んだ後のキャンセル1名、受講料未納の不参加者1名。合計10名で実施。第3日目午後早退者1名
(5) スタッフ 講師 池谷 潤(実施責任者)
補助者 小清水 哲郎(Outdoor LifeStyle Produce)

- (6) 実施内容
実施内容について、参加者の評価を併記する。なお「評価アンケート」の回収は8名分である。

第1日

◇実技：アイスブレイク 参加者がアイスブレイクの効果が体験できるよう、全くお互いを知らない段階で実施するため、オリエンテーション前に行った。

《評価》 良かったとする者 8名

◇理論：キャンププログラムのたて方(理論はNCAJテキストによった。以下同じ)

《評価》 良かった 7名 やや良かった 1名

◇実技：野外炊事① カレーライスと副菜作り

《評価》 良かった 8名

◇実技：様々なアクティビティー①「キャンプファイヤー」

《評価》 良かった 8名

第2日

◇実技：野外炊事② カートンドックを中心とした朝食作り

《評価》 良かった 6名 やや良かったと 2名

◇理論：リスクマネジメント

《評価》 良かった 8名

◇実技：ロープワーク

《評価》 良かった

5名 やや良かった

2名 あまり

良くなかった1名

◇実技：テントテイング

《評価》 良かった

7名 やや良かった

1名

◇実技：野外炊事③野外ならではのメニューとして、ダッチオーブンを用いたローストビーフ

《評価》 良かった 7名 やや良かった 1名

◇理論：アクティビティーの企画

《評価》 良かった 7名 やや良かった 1名

第3日

◇理論：キャンプの指導

《評価》 良かった 8名

◇実技：アクティビティーの実施

《評価》 良かった 7名 やや良かった 1名

◇理論・実技試験

採点後、誤答問題等の解説を行った。36点の一名以外は40点台後半の成績で全員合格となった。

(7)受講者の参加動機感想など

- ・キャンプの基本を学ぶ。将来の活動に活かす
- ・新たな自己発見
- ・趣味を友達と共有したい
- ・キャンプインストラクターとして人脈が広がっていくことを希望
- ・具体的な事例が多く、説明等わかりやすく、学んだことを教育的機関の中で生かしていくため
- ・野外活動の運営サイドという視点で野外活動をとらえ、体験してみると、それが今後の自分に活かしていけるものなのか、又活かしていきたいのか、改めて感じ、考えたいと思った為
- ・今後キャンプ場で働きたいと思ったのと、ずっと自己流だったのでプロに習ってみたいと思った。すごく充実した3日間を過ごすことができました！ありがとうございました！！
- ・キャンプのアクティビティー企画、危機管理、技術指導、グループリーダーの心構え等々について専門性の高い活きた情報を入手するため。

からだに優しい

茶葉料理教室を開催しました

主催：神奈川県キャンプ協会

後援：NPO法人 神奈川県野外活動協会

内 容

1. 日 時：平成23年12月11日(日)
2. 場 所：横浜市内南区 大岡地区センター料理室
3. 講 師：NPO法人 日本食茶の会理事長 石川美知子先生
4. 会 費：一人500円

実 技

- ① お茶葉おむすび ② お茶葉かき揚げ
③ 大根のお茶葉サラダ ④ 塩からとお茶葉のマヨネーズ和え

感 想

中野かおりさん(14才)中学生

私は小学生のときから母が働いているので、料理が大好きです。おばあちゃんの友人の小林先生にも時々作っています。

12月11日の料理教室で、お茶の葉っぱの4種類が石川先生という有名な人が来るというので参加する興味を持ちました。

1番驚いたのは「出ガラ」の茶葉でおいしいかき揚げが出来ました。2番目はチリメンジャコと生茶葉を使った炊き込みごはんでした。香りもよくおいしかったです。今度家でもつくってみようと思っています。

日本キャンプ協会関東ブロック会議報告

平成23年11月19日・20日
於 伊香保温泉一富士旅館
総務 藤野和子

参加団体報告

日本キャンプ協会：受講科目を選ばせて、受講スタンプを集めていく方式を考えている。

D1D2の特別課程を考えている（実力は課程認定校・県協会活動で判定してもらう）。窓口は県協会としていくつもりである。

茨城県協会：事業への組織作りをしている。理事以外の若い指導者を集め若手の会をつくり、事業を任せていきたいと思っている。事業の執行には県からの補助金を得たいと考えている。

会員の名簿がないため、県内への通知が遅くなってしまう。情報の交換のためメーリングリストなどのSNSの活用を考えている。

里美のキャンプ場については、老朽化しており新機能がなく利用が減っている。



会場：一富士旅館からの展望

群馬県協会：委員会で分かれ活動している。年3回（親子・子ども）のキャンプを実施している。指導者養成・広報の委員会がある。国立の施設などで運営の中での役割を担っている。他団体からの派遣要請が徐々に増えているが、応えるための人材が不足していて、活動家が少ないためスタッフが集められない。毎年15名くらいのインストラクターは増えるのだが、その分減っている。

栃木県協会：3月11日を受けて、子どもたちの生きる力を育む一年にしていく予定にしている。広報は日キャンの同封サービスを活用している。

事業として小学校1年から3年までを対象にした山の中のキャンプ、冬2月のキャンプを栃木県内で行っている。県内を4ブロックに分けて（県北・県南など）非常時の炊飯訓練事業を行っている。

インストラクター養成講習会・子どものキャンプなど、参加者が少なくなってきた。若い人への世代交代を期待しているのだがうまくいかない。

東京都キャンプ協会：NPOになって3年目、役員改選を控えており、協会として規定（別紙）を準備してきた。持ってきたので参考にしてほしい。役員候補者規定もある。極力、広く力を合わせて協力して協会の運営をしていきたい。会員減少は東京でもある。事業費・管理費の縛りが生じているので、課題は大きい。若い人たちに中長期ビジョンを考えてもらっている。会員対象フェスティバル・キャンピングセミナーの年間を通して、インストラクターを取得させている。

新たな役員の選出が望まれる。NPO（埼玉・千葉・東京）は規模が大きいのので経理的には縛りが多いので動きづらく大変である。事務局の仕事は専門的知識がないとできない。経理を支えるスタッフが必要となる。片手まではできない。

個人会員18名・団体会員30名（大学などが多く区協会・プロの野外活動団体が加盟しており会員数は多い。）・指導者会員数千名を抱えている。総会など参加できない場合は書面表決制度がある。自分（後藤氏）としては総会キャンプなどを行うと所属意識が生まれるのではないかとと思うが、実行には至らない。

都キャンプ協会の指導者養成ではフォローアップとして子どもたちの夏休み事業の助っ人として活動してもらうことにプラスして、5月から7月の間に2日間程度の通いの講習をしているが、石岡のキャンプ場を利用しているので、受講費用が交通費も含めて5万5千円ほど必要となっている。しかし宿泊講習がないのはキャンプ指導者養成としては疑問がある。

来年の9月にD2講習会をしたいと考えている。

日本キャンプ協会：指導者の養成については、12月3・4日に指導者委員会があるので素案を討議、総会で段取りなどを決めていく。通いでは2時間程度をとって行っていけばすむように、ある程度できるかもしれない。栃木県ではワンデイ+1泊で実施している例もある。

副読本については原稿はあがっているの、来年の後半には間に合うはずである。

名簿の件では、公表は行わない。日キャンでは、住所変更の届の際に在住地協会を本人に紹介している。群馬県協会の登録費の学割の希望は、現状では厳しいと思うが考慮する必要を感じている。

日本キャンプ協会への関東ブロック理事選定について：公益法人化への変換期であり、できれば大きい組織の東京都（後藤氏）に担ってもらいたいとの多数の意見になった。（少数意見として、順に各都県をまわしていくほうがよいとの意見あり）

後藤現理事は、自分としては今受けるつもりはないが、東京都キャンプ協会に持ち帰って皆さんの意見を伝えるということで、選定確定はなかった。

日本キャンプ協会の公益社団法人化について：日本キャンプ協会の事務的な手続き（会計システム・会員管理）などは変更はない。各県の規約で、事務局の所在地を個人宅事務所になっている場合には県市名（ex. 神奈川県横浜市）だけにしていただくように留意してほしい。NPO法人団体との関係は、現行のままでよい。任意団体のキャンプ協会は、支部という表記をはずしてほしい。支部となると連結決算をしなければならなくなる。支部としては存在しないが、契約をして会費徴収の代行、会員登録の代行を行うことになる。契約の更新はどちらかの異議がない限り継続する。親子はだめなので団体同士の業務提携ということになる。支部とか日キャンの支部という表現ができなくなる。それに沿って県協会規約の改正をしてほしい。NPO以外の協会とは、県協会ごとの契約となる。サービスは今までどおり提供していく。

全国キャンプ大会：24年度は休むことになるかも知れないが、その場合でも今年度のような朝霧ミーティングの実施はしていただく。25年度については、県への依頼というより、どこかのブロックに依頼するかもしれない。

都県キャンプの運営：できるだけ民主的手法の運営を心がけてほしい。（会員の捉え方・定足数・議決の方法・委任先の氏名を書ける仕組みの委任状・会員千人以上のところは年間何回以上の事業参加要件などで正会員制度をつくる・可能な限り本人の意思が届けられる仕組みなど）

指導者養成について：D2養成講習会の対象者の絞込みはできるだけである。D2・D1の定着率は高いので、日キャンで集中的に管理できるようシステム化してほしい。（東京都協会）インストラクターは会費を払っているとか、BUCを受けているなど痕跡があるので、今は手作業でしかできないがリストアップできる要素がある。課題として考えていきたい。HPの活用してほしい。メールマガジンは数百人に出している。

来年度の事業計画の目玉として朝日新聞に報道された震災で孤児になった子どもたちのケアのためのキャンプを考えている。

神奈川県キャンプ協会：PACKNEWS（No. 4）とインストラクター養成講習会のちらしに沿っての報告。事業の案内等を行った。

神奈川県キャンプ協会 (PACK)

Prefectural Association of Camping, Kanagawa

NEWS No.5 January 15, 2012

from : North East West South

発行日 平成24年1月15日

発行 神奈川県キャンプ協会 (PACK)

〒232-0022 横浜市中区高根町2-12-7

公園通り式番館6階(三浦正志方)

TEL・FAX 045-253-4545

発行人 会長 小林新治朗

編集責任者 理事長 鈴木 秀雄